

ふるさと意識を育てる授業づくりの技術⁽¹⁾と地域調べの技術

波 巖 (教育学科・教授)

Skills of Planning Lessons for Fostering Hometown-Caring Attitude and Studying Local Areas

Iwao Nami

Abstract

Enhancing “hometown” learning is promoted in the new Course of Study Guidelines issued by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

Metaphorical use of a chocolate pastry may make it easier to understand the relationship between “hometowns” and “local areas”. The inside chocolate filling in this metaphor would be a “hometown” and the outside pastry would be its “local area”. Combining both will produce “local area learning”. Promoting these “local area learning” lessons will foster a “hometown-caring attitude”.

High-level lesson planning and teaching material development skills are required to foster this “hometown-caring attitude”. As highly trained professionals, teachers are expected to be “educational experts” who continuously improve their teaching skills.

Keywords: Hometown/Local areas, Teaching skills, Lesson planning skills and theory, Local area research skills and theory

キーワード：郷土・ふるさと・地域、教育技術、授業づくりの技術と理論、地域調べの技術と理論

はじめに

本学のある鎌倉市大船地区は、現在につながる開発の歴史のうえでは、3つの顔をもつ。

1つの顔は、「大船田園都市構想時代（大正11年～昭和3年）」である。主導したのは東京渡辺銀行頭取の渡辺六郎である。当時一面の水田（泥田）と遊水池であった大船地区を、イギリス風の緑に囲まれた郊外の住宅地である「田園都市」として整備を始めた。しかし、1923（大正12）年の関東大震災及び1927（昭和2）年の東京渡辺銀行の破綻と、それが引き金となった昭和金融恐慌、満州

事変から太平洋戦争までの過程の中で、田園都市計画は中断を余儀なくされた。

この時に整備された基盤の目の街路と洋風建築は、今も大船に息づいており、現在の大船の街の骨格をなしている。水田と遊水池の埋め立てをほぼ完了させ、街づくりの基盤をつくりあげた渡辺六郎の業績は、今も多とすべきである。

2つめの顔は、「大船松竹撮影所時代（昭和9年～平成12年）」である。東京渡辺銀行による大船田園都市構想の中断の後を受け、この土地を所有したのは、松竹株式会社であった。松竹は、全

9万坪の所有地のうち3万坪を撮影所用地とし、残り6万坪を「松竹大船分譲地」とし、さらに都市整備を重ねて売り出した。

1936（昭和11）年、松竹大船撮影所が完成し、「東洋のハリウッド」として、数多くの映画を世に送り出していった。大船でつくられた作品は、男女の愛や絆などのヒューマニズムをテーマにしたものが多く、「大船調」として一世を風靡する。昭和30年代にお茶の間のテレビにその地位を代わられるまで、日本の大衆文化の一大発信基地であった。

大船には、今でも木下恵介監督、鶴田浩二、佐田啓二等のスターたちの住んだ建築物跡や田中絹代が休憩したという休憩所跡、小津安二郎監督、山田洋次監督、美空ひばり、渥美清等が通った食堂やその跡地などが数多く残されている。また、当時のことをよく知る人々も多い。インタビューも可能である。

3つめの顔は、「交通の要衝としての現代の大船（平成12年～）」の顔である。

松竹大船撮影所は、2000（平成12）年、その土地を鎌倉女子大学に売却し、65年にわたる大船での撮影所活動を終える。しかし、大衆文化の一大発信基地として、長く多くの人々を引きつけてきた大船の遺産は、現在も様々な所に残されている。

その一つが、交通の要衝としての地位である。鎌倉市の中心部（古都「鎌倉」）と市外を結ぶ交通の要衝である。大船には、東海道線、横須賀線、根岸線、京浜東北線、湘南モノレールが集中し、急行をはじめ、前述したすべての交通機関が停車する。国鉄清算事業団の本部があった地でもある。

この他にも、多くの各種金融機関や医療機関、理・美容院、各種学校が集中している。また、仲町商店街をはじめとして、四つもの商店街があり、買い物客や飲食客は増え続けている。さらに、一つのビルの中に数種の医療機関が入り、総合病院の経営をしている新しい医療の姿もこの地で見ることができる。

時おりしも、2006（平成18）年12月15日、新しい教育基本法が成立し、12月22日に公布・施行された。その第一章「教育の目的及び理念」、第二

条「教育の目標」の第五項に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と明示された。（※下線は筆者）

そして、この改正教育基本法の理念は、下位法である改正学校教育法、さらに改正学校教育法施行規則へと順次具体化され、平成20年3月28日には「学習指導要領」（※以後、「新学習指導要領」と記述）として公示⁽²⁾されるに至った。

新学習指導要領では、「郷土を愛する」という教育基本法の理念・文言は、「総則」の「第1、教育課程の一般方針」の「2、道徳教育」に以下のように明記された。「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、（中略）伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、（中略）未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする」（※下線は筆者）⁽³⁾。この道徳教育は、周知の通り学校の教育活動全体を通じて行うものである。

さらに、この道徳の目標を受け、各教科・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動すべてに「第3、指導計画の作成と内容の取り扱い」で「第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、（中略）適切な指導をすること」（※下線は筆者）とされた。

要するに、平成23年4月1日以降の新学習指導要領の完全実施にあたっては、各教科・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動（※以下、「各教科等」と記す）共に「郷土を愛する」学習を展開しなければならないということになる。ただし、くれぐれも肝に銘じておかなければならないことは、「我が国と郷土を愛する」学習は、偏狭な自国中心主義や国粹主義を意味しない。

「時代はもう自国の利益だけを問題にして済むような状況ではない。情報化も進み、自国のみに執着する独善的な国家主義や民族主義では、世界に共通する重要問題を解決できるはずもない」のである⁽⁴⁾。こうした意味を内包するのが、教育基

本法の「郷土を愛する」に続く、「他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」であると考え。つまり、世界に通づる郷土学習をつくらなければならないのであり、これはとりもなおさず広く国際理解教育そのものである。

さて、このような教育の大きな流れのなかで、大船という郷土を考えると、何としても「大船田園都市構想時代（大正11年～昭和3年）」の顔と「大船松竹撮影所時代（昭和9年～平成12年）」の顔は、郷土大船地区の文化遺産として後世に語り継いでいかなければならないと考える。現在、大船の地域学習は、古都鎌倉の学習の中に埋没してしまっている。これでは、「郷土大船を愛する」意識など育ちようがない。前述の通り、一時期大船は、絶対忘れてはならない日本文化の中心地だったのである。郷土大船の誇りでもあるし、日本人の心の拠り所の「故郷（ふるさと）」でもある。本稿執筆のいたたまれぬ動機である。

本稿では、まず「故郷意識を育てる授業づくりの技術」の構造を解明したい。これは、新学習指導要領で新たに要請された「考える学習活動」の中核である「話し合い活動」について明らかにするものである。次いで、その技術をモデルとして、「地域調への技術」を解明したい。

1. 「郷土」と「地域」、「故郷（ふるさと）」の関連

新学習指導要領の各教科等では、総合的な学習の時間（※以後、「総合的な学習」と記す）での一カ所を除き「郷土」という文言は使われていない⁽⁵⁾。その代わりに、「地域」という言葉が、総合的な学習及び生活科、社会科で多用されている。

本稿では、改正教育基本法や新学習指導要領で「郷土」という理念・文言が用いられた事情に鑑み、はじめに、「地域」との整合性を整理しておかなければならないと考える。また、新たに導入された郷土の学習について、その教材化の具体的内容、方法・技術を明らかにしておく必要もある。

まず、「地域」という言葉が多用されている総合的な学習及び生活科、社会科について、要点を

みてみたい。

総合的な学習では、周知のとおり、以下の三つの課題が例示されている。

- ①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題
- ②児童の興味・関心に基づく課題
- ③地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題

これらの三つの課題のうち、「地域」が特に強調されているのは③である。これには、

「地域の伝統、文化、行事、生活習慣、経済、産業などにかかわる、各地域や各学校に固有な生活上の諸課題」がある。そして、「すべての地域社会には、その地域社会ならではのよさがあり、同時に問題点もある」とする。

また、「地域」と「郷土」のかかわりについては、次のように述べる。

「地域や学校の特色に応じた課題は、児童の生活圏など児童の身近にあるとともに、そのいずれもが、よりよい郷土の創造にかかわる課題である。また、これらの課題は、現代社会の課題が身近な地域において具体的な事実を伴って現れたものと考えることもできる。地域社会に生きるすべての人が、（中略）日々の生活の中で自己の生き方とのかかわりで考え続け、よりよい解決を目指して行動することが望まれる」⁽⁶⁾とする。

文面を見る限り、「地域」というのは「身近な所に具体的な事実として存在する」ものである。これに対し、「郷土」というのは、「考え続け、よりよい解決を目指して行動し、創造する目標」である。つまり、「地域＝客観的事実」であり、分析・総合という論理的な側面をもつ。これに対し「郷土＝創造すべき理念」であり、人間的・情緒的という感性的な側面が強い。

次に、生活科の学習指導要領をみてみたい。

生活科では、活動の舞台が「身近な生活圏である地域」⁽⁷⁾であるせいもあり、様々な所で「地域」という用語が使われている。例えば目標（1）には、「自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心をもち、地域のよさに気付き愛着をもつことができるようにする

(以下省略)⁽⁸⁾とある。内容では、(3)、(5)、(8)にそれぞれ「地域で生活したり働いたりしている人々」、「季節や地域の行事にかかわる活動」、「地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動」⁽⁹⁾とある。

生活科でも、総合的な学習同様、「地域」を「身近な所に具体的な事実として存在する」ものであり、「客観的事実」としてとらえていることがうかがえる。

ところで、生活科と郷土については、前生活科教科調査官であった嶋野が次のように述べている。

「子どもが地域の人や社会や自然に関心を持ち、地域の人々が子どもに関心をもつようになって、地域は子どもにとって一層安全で、安心して過ごせる場所になっていく。地域社会と連携した教育を進める中に、こうした望ましい変化が起きている。それは、子どもにとっての「ふるさと学習」になる」⁽¹⁰⁾（※下線筆者）。要するに、「地域」に関心をもつことによって、子どもの心の中に、地域に対する望ましい変化が起き、「ふるさと」へと変化するというのである。嶋野は、次のようにも述べる。

「ふるさとは、たとえ遠く離れて生活するようになったとしても、ことあるごとによみがえってくる場所である。また、疲れ、孤独、苦しみや心配事がある中でも、自身を癒やしてくれる場所でもある。それだから、人は自分のふるさとをもちたいと願うのである。生活科学習は、子どもの中に「ふるさとを育てる教育」としての役割がある」⁽¹¹⁾（※下線筆者）。ここでは、ふるさとのもつ帰属意識（アイデンティティ）について言及している。

嶋野は、郷土を「ふるさと」と表現しているが、一般的には「ふるさとの観念は人々の郷土に対する思いである」⁽¹²⁾ととらえることができよう。郷土を、創造すべき課題だとすれば、その課題に向かう人々の様々な思いが「ふるさと」である。つまり、子どもたちが安心して心置きなく遊べる自然豊かな環境が郷土（理念）とすれば、その郷土で、日が落ちるまで野山を駆け巡り、友と群れて遊んだ懐かしい具体的な思い出の場所がふるさとである。「場所的な実体を持ち、今日より明日に希

望を抱いているつながりをもった人々を」⁽¹³⁾とらえ直したのが、とりもなおさず「ふるさと」⁽¹³⁾である。郷土とふるさとはセットになっており、一般的には「ふるさと（故郷）」という用語が使われている。

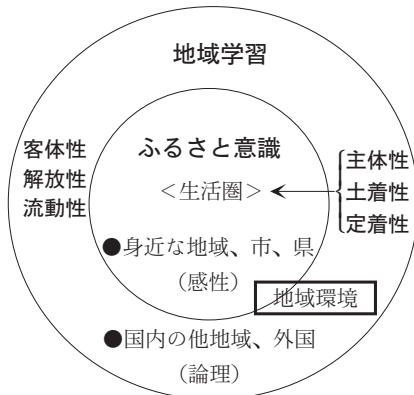
最後に、社会科の学習指導要領をみてみたい。「地域」という言葉が頻繁に使われているのは、第3学年及び第4学年の目標と内容である。これは、中学年社会科の学習活動の舞台が、生活科同様、身近な生活圏としての地域であることによる。目標では、「(1) 地域の産業や消費生活の様子、(中略) 地域社会の一員としての自覚」、「(2) 地域の地理的環境、(中略) 地域の発展に尽くした先人の働き、(中略) 地域社会に対する誇りと愛情を育てる」、「(3) 地域における社会的事象を観察、調査する、(中略) 地域社会の社会的事象の特色や相互の関連」とある。

社会科でも、総合的な学習や生活科同様「地域」を「身近な所に具体的な事実として存在する」ものであり、「客観的事実」としてとらえていることがうかがえる。しかし、生活科よりも一般的であり、科学的である。これは、社会科の学習指導要領でいう「地域」が、日本のどこの「地域」にも当てはまることが前提となっているからである。「地域は知的概念である」と言われる所以である。

社会科の学習指導要領では、1958（昭和33）年の学習指導要領まで使われていた「郷土学習」が、以後「地域学習」へと変更になった経緯がある。地域の解釈については、そのまま、今回の学習指導要領の改訂でも引き継がれている。そして、郷土学習から地域学習へ変化したいきさつについては、朝倉隆太郎の論文を援用しながら、すでに『鎌倉女子大学紀要第16号』⁽¹⁴⁾で明らかにしたところである。

しかし、「はじめに」でも述べたとおり、社会科の学習においても「郷土を愛する」学習は必須である。

この両者の整合性については、次の図を用いて整理した。（※同上紀要第16号と重複するが、「故郷」を「ふるさと」と変えて以下に再掲載する。）



〈図1 ふるさと意識を核にした地域学習の構造〉

この図は、饅頭に例えるとわかりやすい。肉まんでもいいし、あんまんでもいい。または、温泉饅頭でいいし、あんパンやクリームパン、カレーパン、チョコレートパンでもいい。真ん中の餡や外側の皮、大きさや形は様々なものがある。要するに個性的な方がいいのである。ふるさととは、ひとり一人の心の中に存在するものであり、それぞれ異なっていていい。

さて、芯にある餡の部分は、味の濃厚な「ふるさと意識」である。人々の思いの詰まった部分である。外側の皮の部分は、中華まんやパンなどの種類により異なるが、種類毎に特徴は決まっている。この部分は、知的で客観的な「地域学習」である。

これらの饅頭には、はじめは餡がない。あるのは皮と麦粉の肉ばかりである。この中身が、嶋野の言うとおりに、地域学習を通し地域に対する関心が増すにつれ、味の濃厚な餡へと変化するのである。

2 授業づくりの技術

(1) 技術についての原則

はじめに、技術についての原則をまとめておきたい。

註(1)で述べたとおり、本稿では、教育技術を「教育方法の個々の課題を実施し運用するにあたっての高度に洗練された能力」と定義し、論を進める。

ちなみに、「教育方法の個々の課題」とは、授

業についての「計画：P<Plan>→実施：D<Do>→点検：C<Check>→対処・改善：A<Action>」の4つの要素についての方法である。要するに、教育技術という場合は、「授業の方法についての高度に洗練された能力」である。端的に述べるなら、方法は「論」であり、技術は「能力」である。

具体的には、野球史上初の9年連続200本安打を達成したマリナーズのイチローをイメージすると分かりやすい。イチローについては、誰も「イチローの安打を打つ方法は素晴らしい」とは言わない。誰もが「イチローの安打を打つ技術は素晴らしい」と言う。これこそ、方法と技術の違いの本質を言い当てている。「イチローの安打を打つ技術は高度に洗練された能力」なのであって、「(方法)論」ではない。

しかし、その能力は、決して小手先のハウツーでつくられるものではない。イチローが、人の何倍もの練習をし、道具にこだわり続けていることはよく知られている。こうした努力があり、道具を使いこなしてこそ、技術はつくられるのである。また、状況に合わせた修正能力の高さも知られるところである。これらの技術は、イチロー独特の個性的なものであり、誰をしても真似のできない技術である。方法論をいくら唱えても、安打を打てなければ意味がない。筆者は、「現場の教師は、(イチローのような)優れた個性的な教育技術者であるべきだ」と考えている。

この「高度に洗練された能力」である教育技術についての原則を、以下に箇条書きにまとめておきたい。

- ①教師の見識も知識も、深い愛情も、子どもたちに対しては、教師の磨かれ鍛えられた技術を媒介として発現される。⁽¹⁵⁾
- ②技術は、設定された目的や目標の達成を目指して用いられる手段である⁽¹⁶⁾。すなわち、技術は、常に子どもの可能性を伸ばすことを目的、目標としている。
- ③技術は、個々の教師の生き方と結びついた個性的・統一的なものである。
技術は、その教師の人柄や、生き方、生活の姿

勢などと密接に結びついている。決して、断片的な手順や操作（ハウツー）ではない。

- ④技術には、常に道具が伴い、技術はその使用する道具（教材・教具）によって特徴付けられる⁽¹⁷⁾。
- ⑤技術は、道具を使用する教師や児童・生徒の能力や、その場その場の状況に大きく依存する。したがって、技術は、その時々状況に合わせて適切な手段方法を工夫し、創造していく個別的・創造的なものである。普遍的な教育技術は、存在しない⁽¹⁸⁾。つまり、P・D・C・Aを授業の状況に合わせて変化できる創造的能力である。
- ⑥教育技術も、それが合理的なものである限り、客観的法則性に従っている。それゆえ、「技術は、客観的法則と主観的目的との総合」と言われる⁽¹⁹⁾。両者が噛み合せて始めて「洗練された能力」が形成される。

（2）授業づくりの3つの技術—90分で授業は上達する—⁽²⁰⁾

①授業技術（コツ）を獲得する—洗練された技術を駆使する—

大学で担当している講座に「教育実習指導」や「教科教育法」がある。学習指導案を書き、それにもとづいて模擬授業をする科目である。

大部分の学生は、自分の教材研究してきたことを得々と説明しようとする。

まず、そこからが誤りである。自分で説明しなくなったなら、それを子どもに説明させる技術をこそ身につける必要がある。そうしないと、主体的に議論のできる学級はいつまでたっても育たない。「子どもたちが、主体的に議論する授業をつくりたい」というのは、どの教師にとっても大きな目標である。しかし、なかなか思うようにはいかない。教師が説明するような授業では、大半の子どもの目は虚ろになる。当然学力は一気に下がる。

ここで、「主体的に議論させる魔法のような技術（コツ）がある」と言っても、あまり信じてもらえないかもしれない。しかし、ある。指導のポイントは、次の三つである。

ア、「どうしてそう思ったの？」と、必ず発言の根拠を問う。

子どもの発言というのは、一見同じであっても、根拠は必ずしも同じではない。発言の元になっている体験が、皆それぞれ異なっているからである。「似ているけれど、ちょっと違うよ」という声が必要出てくる。「同じです」と声を揃えて言わせる授業をしばしば見かけるが、言語道断である。この一言を言わせている限り、絶対子どもたちが主体的に議論する授業はつくりえない。

ただし、中には「別に」という反応しか返さない子どもがいる。こういう子どもは、多くの場合、根拠の如何に関わらず正しい答えは一つであり、正確に答えを言えさえすれば事足りると思っていることが多い。受験の知識中心の学習を求めている。

また、コミュニケーションに自信の無い子もいる。

対処の仕方としては、後者はそれ程難しくない。教師が中心となって、周囲の子どもの助けも借りながら、その子の言いたいことを聞き出し、表現できるよう支援してやればいい。子どもの力を借りるといえるのは、子どもでなければ分からない心に響く独特の言葉を彼らも持っていることが多いからである。

前者については、経験を仲間で共有することの大切さや、仲間の存在が自分を高めていくうえで欠かせないということを自ら学んでいくしか方法がない。受験知識中心の学習は、仲間を蹴落とす学習である。価値観が正反対である。いつでもその子のことを気にかけて、時間をかけ対話していくことが重要である。いつかは分かってくれることを期待しながらの持久戦を覚悟することである。

イ、「〇〇さんは、こう言っていますが、皆さんはどう思いますか？」と、全員の場合に返す。

発言をした子の意見が、明らかに間違っているとか、孤立するであろうと思われたときは、教師がその子の立場に共に立ってやる。「△△さんの意見は素晴らしい。先生もまったく同じ考えです」と言うのである。子どもたちは、内心「えっ、どうして？」と驚き、一歩踏み込んで深く考え始め

る。「どうしても先生の考えに納得できない」と反論してきたらしめたものである。△△さんといっしょに、徹底的に揺さぶっていききたい。

ウ、状況を詳しく話すよう促す。

「その意見面白そうだから、もう少し詳しくお話して。その時のやりとりもあつたら、それもやって(再現)みて」とか、「みんな、もう少し詳しく聞きたいという顔をしているよ」と言い、状況を詳しく話すよう促す。教師のこの一言で、子どもたちの集中度がぐっと増す。この技術の達人が落語家である。

以上の三つの技術(コツ)は、筆者が、長い小学校の現場経験の中からつかみとってきたものである。さて、学生の模擬授業でも、この三つのコツを試させる。すると、箸にも棒にも引っかけなかったひどい授業が、あつという間に生き生きとし出す。これこそ、主体的な議論のための教育技術の一つである。これは、技術を獲得する段階である。

②学級経営への発展・コツからの脱皮―洗練された技術を磨く―

最初のうちは、教師が、上述のような技術(コツ)で引っ張っていくのもいい。しかし、時間がかかるし、非効率的である。教師の発言を減らし、子どもたちが活動する時間を増やすよう工夫するべきである。そのためには、上記3つの技術が、子ども自身の血肉になるよう習慣づけていく必要がある。この段階は、学級経営のレベルであり、獲得した技術を磨く段階になる。

まず、「発言の根拠を問う」という技術であるが、子どもが発言する時、次のように言わせるよう習慣づけていく。

「ぼくは、〇〇だと思います(結論)。そのわけは、××だからです(根拠)」

「私は、△△さんの考えには反対です(結論)。なぜなら◆◆だからです(根拠)」。これで、いちいち教師が根拠を問わなくてもいいようになる。

次の「子どもの発言を必ず全員の場に返す(敷衍)」というテクニクであるが、これは、次のように習慣づけていきたい。「ぼくのことを、みんなはどう思いますか。意見をください」とか

「私の考えを、▲▲さんはどう思いますか」とか、助言が必要な時は「先生はどう考えますか」というように、必要に応じて教師にも当てるようにさせる。すると、これまで教師の方ばかりを向いていた姿勢が、子どもたち同士の方に向き始める。これで、議論の体勢ができる。

子どもたちが「主体的に議論する授業」というのは、教師の方を向いてばかりいてはつれない。教師を介在した授業からもう一歩抜けだし、教師を介在せず、子どもたちどうしが直接向き合い議論を戦わせる体勢をつくらなければならない。ただし、ここまで子どもたちが育つためには、かなりの習慣づけ(訓練)が必要であることはいまでもない。教師の粘り強さが重要である。

三つ目の「状況を詳しく話すよう促す(状況説明)」という技術であるが、これは、身振り手振りを入れて話すように習慣づけていくことで身につけてくる。

まず、簡単な背景を説明させ、次いで登場人物を登場させる。例えば、夏休みに、ぼくは、お母さんといっしょに親戚のおじさんの畑に行きました。おじさんは、さつまいもの収穫の仕方を教えてくれました。ぼくが、「どうやって掘るの?」と聞いたら、おじさんは「(備中) 鍬を畝の下の方に入れて打ち下ろすといいよ」と言ったので、「打ち下ろしてから、どうするの?」と聞いたら、「いもを傷つけないようにそっともち上げるんだ」と教えてくれました。

これを身振り手振りで説明できたら、臨場感が増し、集中度が格段に高まる。

(3) 授業技術と授業理論・理念―授業技術ばかりでは授業は行き詰まる―

技術ばかりでは、授業は、いつか行き詰まる。「授業をうまくやれさえすれば事が足りる」という表面を飾る小手先のことに流されてしまいがちだからである。これでは、子どもの中にどんな学力が育っているのか確信がもてない。ひいては、どういう人間が育てられるのか先が見えないということになる。前述原則論②の「技術は、設定された目的や目標の達成を目指して用いられる手段

である」に関連する。

そうならないためには、次の二点をしっかり確認しておくことが重要である。

一点目は、それらの技術がどういう授業理念や理論（授業論）にもとづいているかである。つまり、どういう学力や人間が育てられるか（目的や目標）という確認である。

二点目は、どんなに教育理念・理論や授業技術がしっかりしていても、教材研究と教材づくりがしっかりなされていなければ、授業そのものが成立せず、技術の使いようがない。例えて言えば、どんな名工であっても、木材が質の良いものでなければ、良い家は建てようがないのと同じである。「材料（教材）7分に腕（授業技術）3分」であることを強く確認しておきたい。

ここでは、先述した三つの授業技術が、どのような授業論に依拠しているか要点を簡単に述べておきたい。

現代の授業論は、端的にいうと、二つの柱からなっていると考えている。

●今、自分が何をしたいのか、将来どうなりたいたのか。（「なってみたい自分」）を明確にイメージできるような授業。（例、四方位が分かる自分。九九を言える自分、古文が読める自分等）

●これまで及び今の自分から、少しずつ脱皮していけるような授業。「なりたくない自分を崩し、なってよかった自分づくり」をしていけるような授業。（例、四方位なんか覚えるのが面倒くさいと思っていた自分から、四方位を覚えると便利なのがあると思える自分）

つまり、授業とは究極的には、「自分という人間」づくりでもある。四方位を覚えるという学習活動と同時に、嫌なことでも、自主的にかつ根気強く取り組むという人間性を高めていっている。

そして、この二つの柱を成立させるためになくてはならないのが「集団のパワー（学級・学年集団、教職員も含めた学校集団、家庭・地域集団等）」である。集団に支えられてはじめて、「なってみたい自分」を明確にイメージできるし、「なりたくない自分を崩し、なってよかった自分づくり」をすることができる。集団から切り離され、孤独

になったとき、人は本性むき出しの自分でしかありえなくなることは、最近の様々な無差別殺傷事件が如実に示している。

授業では、まず個々の知的な発見を友達集団に伝え合うことが必要である。つまり、発見をもたらした体験を、自分の言葉で率直に語ることである。これは、自分の価値観と向かい合うことでもある。そのなかで人は、自分のしたかったことやできるようになりたかったことを知り、友の反応を鏡としながら、改めて自分を明確にイメージできる。

それを聞いている友は、質問、賛同、反論を通して、「そうか、だから〇〇君はこういう行動を取っていたんだ」とか、「でも、私の考えは違う」、「ここはこう反省し、直していく必要がある」、「こうすれば、問題点を克服できる」というように「今の自分を突き崩し、より上の自分を目指す」ことができる。それに答え、さらに詳しく語る〇〇君は、さらなる高い価値観を獲得することができる。

授業とは、お互いの力で価値観を共有し、かつ自分なりのより高い価値観を獲得していく営みであり、時間である。そのために、議論は欠かせない。

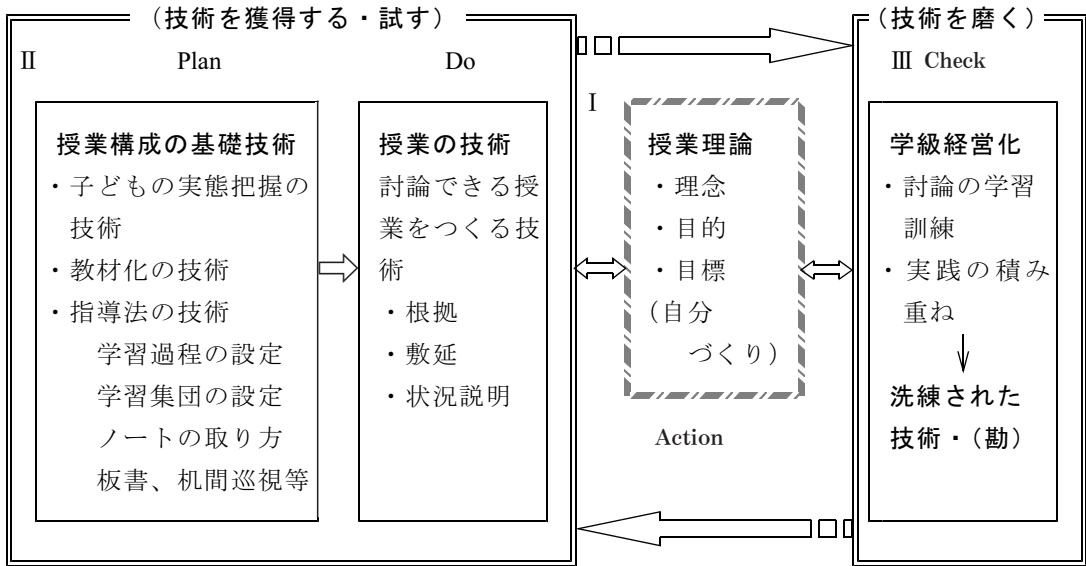
先述の「根拠を問う」、「個々の意見を全員に返す」、「詳しく話させる」という教育技術は、それぞれ「体験を話す」、「価値観を共有する」、「自分なりのより高い価値観を獲得する」という教育理論に対応し、依拠している。そして、究極的には「自分という人間づくり」の教育理念に向かっている。

（4）教育技術の構造

ここで、これまで述べてきた「授業づくりの3つの技術」と「授業技術と授業理論・理念」をモデルとして、教育技術の構造を、図を中心にしながらか整理しておきたい。

さて、授業づくりは、理念、目的、目標という「授業理論」を核にしながらか、スタートする（I）。

そして、これらに沿って、子どもの実態が把握され、素材の教材化が図られ、指導法が選択され



<図2教育（授業）技術の構造>

る。学習指導案の「単元設定の理由」に記述される要素である。ここでは、子どもの実態把握の技術、教材化の技術、指導法についての技術が必要となる。(Plan)

Planができると、実際に授業実践が行われる(Do)。新学習指導要領では、「考える」学習活動が強調・付加された。例えば、社会科では、従来「調べる→表現する」という学習活動で事足りていたのだが、これが「調べる→考える→表現する」となった。この新たに加わった「考える」という学習活動としては、「個々に考え、書く」とか、書いたものを元に「集団で話し合う」といった学習活動が想定されている。本稿で、「討論できる授業をつくる技術」を大きなテーマに据えた背景の一つでもある。

さて、プランの作成から授業実践までには、相当の質・量の授業技術が要求される。ここでは、これまで蓄積されてきた技術を試すことはもとより、目の前にいる子どもの実態や教材開発に合わせた新たな技術の獲得が必要となる。教師が、産みのために最も悩み、もがき苦しむ段階である(II)。

これまでの技術の世界は、どちらかという教

師が中心である。この教師中心の授業を、子ども主体の授業に転換していく必要がある。この方法論が、既に詳述したとおり学級経営化である。Iの授業理論が合理的で普遍性があれば、IIの技術は、子どもの中に無理なく溶け込んでいくことができる。さらに技術が評価・点検(Check)され、磨かれていく(III)。

しかし、技術というのは、目の前の子どもが変化し、子どもを取り巻く環境が変化し、教師自身も経験を積み変化している限り、変化せざるを得ない。イチローでさえ、毎日筋トレを実施し、どのような状況に対しても瞬時に対応できる基礎体力をつけ、さらに試合では、打席毎にフォームのチェックを行い微調整を実施しているという。

教師も同じである。授業毎に、駆使した授業技術のチェックを行い、時には原点に立ち返って修正・改善を積み重ねていかなければならない。ここでは、理論によるチェックはもとより、言葉では表現しきれないようなわずかな問題点をも見逃さない蓄積された「勘」が大きな役割を果たす。こうして、技術は、高度に洗練されたものに高まっていく(III)。

3、地域学習における教育理念—教育理論—教育技術

この項では、「材料（教材）7分に腕（授業技術）3分」といわれるとおり、授業づくりの命ともいえる教材化の技術について、〈図2教育技術の構造〉をモデルとしながら述べたい。

さて、各学年、各教科の中で、教師がもっとも苦手としている教材化の一つが、3年生社会科の地域教材である。地域の教材化は、教師も子どもも毎日地域に接し、あまりにも身近であり、見慣れていて疑問をもちづらいからである。

また、地域についての教育技術及び教育理論、教育理念についても、あるようでない。身近であるが故に、教育技術など不要であるという思いが落とし穴になっているように思われる。特に、鎌倉市大船地区では、古都鎌倉については教材化が進み、教師も子どももよく知っているが、もっともよく知っているはずの地元大船については、あまり教材化が進んでいない。この身近な地域を教材化する技術・理論を身につければ、教師の力量は飛躍的に向上するはずである。ここでは、大船を例に取り上げながら、地域の教材化の技術について述べてみたい。

（1）昔の痕跡を探す。昔の痕跡は、消せない。

今に必ず残っている—地域調べの技術①

ほとんどの教師も子どもも、「昔の痕跡は、今はもう無い。探すことは不可能だ」と思っている。しかし、それは、まずありえない。地名、道路の曲がり具合、建物、街路樹等、探せば昔の痕跡は必ず残っている。この教材化についての技術を知っているかどうかで、授業実践に相当の差が出る。特に、日本人は、樹木には靈魂が宿っていると信じてきた民族である。日本各地で、老木の伐採を進めようとして、地域住民との摩擦を起こしているのは、こうした古来から知らず知らずのうちに引き継がれてきた原始的な感情との衝突による。

右の写真は、かつて大船にあった渡辺六郎（東京渡辺銀行専務取締役）邸である。

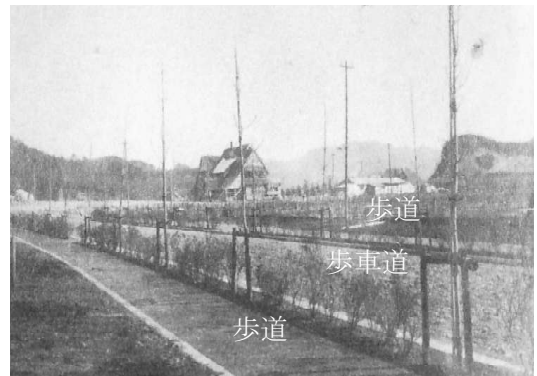
東京渡辺銀行は、日本の代表的銀行であったが、1927（昭和2）年、片岡蔵相の帝国議会衆議院予

算委員会での失言により営業停止に陥った。そして、翌1928（昭和3）年、破産宣告を受け、昭和金融大恐慌へとつながっていった。

話を戻すが、渡辺六郎は、1921（大正10）年、田園都市構想のもと、大船の土地買収を開始した。翌年には一帯を埋め立てて売り出しを開始した。しかし、1923（大正12）年関東大震災が勃発し、火災や住宅の倒壊等の被害に遭う。

写真は、現在の大船駅（笠間口）近辺から、鎌倉女子大学（旧松竹大船撮影所）方面を眺望したものである。道路は、松竹通りとして現存している。渡辺邸は、今は取り壊されていて、跡形もない。並木は、植樹されたばかりの葉のないイチョウの幼木と、その間の背の低いさつきの木である。1923（大正12）年に撮影されたものである。

〈写真1 旧渡辺六郎邸〉



ところで、この渡辺六郎邸が、現在の大船のどこに当たるのかについては諸説がある⁽²⁾。

主なものは、次の三つである。大船駅を出て、鎌倉女子大学に向かう松竹通りの

ア、現在の西友ストアのある所

イ、現在の山蒼神社のある所

ウ、松竹通りと旧鎌倉街道との交差点（かつて、夕陽丘と呼ばれた）

さて、この写真から、右の3カ所のどこか推測できるであろうか。

写真では、渡辺邸は道路の右側にある。しかも、少し奥まったところに建っている。邸宅の前には大きな道路が走っている。とすると、ウの交差点説は取りにくい。

残るは、アかイであるが、この写真からは、残

念ながら確定することはできない。

そこで、地域調べの技術「昔の痕跡を探す。昔の痕跡は、消せない。今に必ず残っている」を使うのである。つまり、「このイチョウ並木は、現在も残っているはずである」と考えるのである。

前述したとおり、古木は意外と残っていることが多い。



＜図3 現在の大船の街路樹＞

れてきたものであろう。

現在、並木として残っているのは、山蒼神社の手前までである。写真でも、確かにイチョウ並木は渡辺邸の手前で止まっている。こう見てくると、アの西友説は難しくなる。やはり、山蒼神社近辺しか考えられなくなる。しかも、山蒼神社前を左右に走っている道路は、当時の鎌倉街道（旧々鎌倉街道）である。（※旧鎌倉街道は、現在の大学寄りの「離山通り」である。）

以上は、「昔の痕跡を探す。昔の痕跡は、消せない」という技術を使った地域調べの一例である。

この技術は、＜図2＞の「Ⅱ、Plan 教材化の技術」に当たる部分である。

（2）時代を輪切りにすることの意義＝地域の時代の顔を明らかにする

一地域調べの技術を支える理論一

渡辺六郎邸を調べる技術が、どんな意味をもつのであろうか。トピック的に授業を創るのではなく、地域調べ全体の構造のなかに位置づけ、理論

との関連をもたせたい。

時代というのは、必ずあるひとまとまりの相をもつ。戦後の日本であれば、「復興から工業化へ」、「高度経済成長から大量生産・大量消費時代の終わりへ」、「冷戦からグローバル化、少子・高齢化へ」という相である。社会が目指した目標、人々の願い、価値観が、相毎に異なるからであり、様々な出来事も相の中に位置づけ評価されなければ誤ったものになってしまう。また、将来が展望できない。

特に、地域の将来像を描きふるさとの将来に夢をもって生活することは、地域に生きる人にとっては欠かせないことである。とはいえ、地域の将来像を描くことは容易ではない。

そのためには、どうしてもふるさとの過去を知り、現在のふるさとのよさや問題点を理解しなければ、将来のふるさとの展望できない。地域の歴史的な相を明らかにしなければならない所以である。

さて、本稿の冒頭で述べたとおり、大船の近現代の歴史については、3つの時代背景・相が、現在の大船の顔を形作っている。

1つは、渡辺六郎による大船田園都市構想時代（大正11～昭和3年）であり、2つは、大船松竹撮影所時代（昭和9～平成12年）、3つは、現代（平成12年～）である。

以上のような大船の歴史の大枠を踏まえるとき、渡辺邸を調べ、渡辺六郎に興味をもち、より深く調査することの意義は非常に大きい。渡辺六郎邸調べは、はからずも大船の大きな相（第一相）の中核をなす事柄だったのである。これは、中学年社会科の開発単位としても、興味深い教材化が可能である。

ところで、大船の歴史的データを元に、過去を分析し、歴史的な相を明らかにする作業は、「授業の方法についての高度に洗練された能力」とは言い難い。これは、主として自らの勘によって磨いていく技術の世界のことでなく、緻密に根気強くデータを整理・分類しながら、実証的に全体構造を構築していく理論の世界のことである。＜図2 授業技術の構造＞の「Ⅰ、授業理論」に当

たる部分である。そして、「昔の痕跡は、今に必ず残っている」という地域調べの技術を支える理論的背景がここにあることを確認しておきたい。

(3) 技術・理論を支える理念—地域の将来を考え、参加する。

次いで、地域の歴史を知ることが、どういう理念につながっているのか記しておきたい。

地域の昔を知ることが、地域の今を知ることにつながる。そして、地域の昔と今を行き来することで、地域の将来を展望することができる。地域を学ぶことの最終的なねらい（理念）は、地域の将来を展望し、地域づくりに愛着と誇りをもって参加できることである。

現在、鎌倉市や大船の商店街の人たちが中心となりながら、駅前にプロムナードや緑地帯をつくる構想を練っている。まさに、渡辺六郎が夢見た田園都市構想の現代版再現であり、一世を風靡した映画都市を継承する文化都市づくりを受け継ぐ構想であると言えよう。

(4) 地域の痕跡探しを広げる—技術を磨く—

渡辺六郎邸探しだけでは、子どもに「昔の痕跡を探す」という技術が完全に身についたとは言い難い。いろいろな場面で、その有用性を確かめ、血肉化させるようにしたい。

例えば、本学のすぐ西側にあった「離山」や、東側にある「東山」についても昔の痕跡探しの技術を応用させたいものである。これは、現在の東大地区の地勢図に描かれた道路を辿ることでも分かるし、現地を実際に歩いてみることから推測できる。両山の縁辺や残された箇所が現存している。これに、古地図や当時の写真などを併せて関連させると、くっきりと過去に存在した「離山」や「東山」の像が見えてくる。こうした技術の応用によって、技術は磨かれ、より洗練されたものとなっていく。〈図2 授業技術の構造〉の「Ⅲ、check・技術を磨く」に当たる部分である。

(5) その他の地域調べの技術

以下、その他の地域調べの技術を簡単に説明し

ておきたい。

○地名はセットで調べる。②

「東山」(東)があれば、西が分かる。また、北、南が分かる。四方位がはっきりすると、八方位も自ずと明らかになる。西と東の空を比べれば、天気予報も可能である。

「大船駅東口」があるなら、「大船駅西口」もあるはずである。

次に、方位の起点になった地点を調べたい。「方位の起点」とは、地域開発・発展の中心地である。地域の開発は、そこから広がっている可能性が高い。

水田地帯には、しばしば「田」のつく地名や人名がある。「前田」等である。「前田」があれば、「中田(田中ではない)」もしくは「本田」があり、そして「奥田」がセットになってあるはずである。この際、開発の中心は、「中田」、「本田」である。ここが拠点となって、地域が発展していった可能性が高い。人名の多くは、地名が元になっている。

「上・中・下」「左・右・(両者の)中心」などについても考えてみたい。上板橋・中板橋・下板橋、上井草・下井草、上富良野・中富良野・下富良野、上田・本田・下田等である。もちろん、「中」や「本」が中心となって発展していった可能性が高い。セットで調べれば、地域が点や線ではなく、広がりとして見えてくるはずである。

○地域は、裏・表両面から見る。③

「東山」の鎌倉よりは、自然が豊かでトンビが営巣し、台湾リスが木々を駆け巡っている。湧水が豊富にわき出して、自然の池をつくっている。これを見て、「東山」は、自然豊かな土地であるなどと思い込んではいならない。「東山」を、反対側の横浜市栄区の方からも見てみたい。すると、トンビの巣のあるすぐ近くの木まで、住宅が迫っているのに気づく。「東山」の自然は、かろうじて本学に支えられていることが分かる。自然保護に力を入れなければたいへんなことになることに気がつくはずである。

○自分の中に、「絶対地域基準」をつくり上げる。

ここでは、2つの例をあげたい。④

ア、「百円の太根ってすごく安い」という感覚で

ある。その理由は「生活科で大根を育てたとき、毎日お世話したのに、小さな大根しかできなかった。それなのに、こんな大きな大根が百円なんて、信じられない」。これは、生活科における体験が絶対基準値になっている⁽²³⁾。相対的基準値しかなければ、「百円の大根は、二百円で売っている大根よりも安い。」という、干からびた判断しか示せなくなる。

イ、「東山」は、どのくらいの高さであろうか。絶対基準値をもつためには、まず東山の頂上に登ってみることである。そして、周りを見渡して見ることが大切である。そうすると、鎌倉女子大学の体育館の屋根の全面が見える。屋根の全面が見えるということは、「東山」は、鎌倉女子大学よりも高いことになる。その後で、地形図から正確な高さを割り出すのである。

絶対基準値は、「実感（体験）+理論」でつくられる。特に実感（体験）を大切にしたい。

実感7：理論3くらいで、絶対基準値は、形成されるように思う。

○道路は現在の地域の顔であり、時代区分は昔の地域の顔である。⑤

学習指導要領では、地域の特徴を子どもにとらえさせることを求めているが、これには、空間的地域（地理的地域）と時間的地域（歴史的地域）の両面から迫る必要がある。その際、前者は道路を、後者は時代の相をとらえるとよい。ただし、これ以後の作業は、技術というよりも理論に関わる部分が大きくなることは、前述のとおりである。つまり、特徴をとらえるという技術は、データの分析・総合による地域の理論づくりのための「入り口」としての役割をもつ。

○地域の神社、お寺は、昔を知る宝庫 ⑥

地域にある神社、仏閣は、ふるさととの開発の成功を願って、関係者が建立したことが多い。一級の昔の資料が残されている。

○第一印象（第一勘）を大切にしたい。勘は、体験の集大成である。⑦

見慣れ、住み慣れてしまうと、地域の不思議も当たり前になって、何の疑問も生じなくなってしまう。第一印象（第一勘）を大切にこそ、生

きた地域学習が展開される。

<註>

(1)本稿では、「技術（※正確には教育技術）」を以下のように分類・限定して用いる。

まず、教育の目的及び理念、目標（社会状況、教育課題と教育改革、世界の教育の現状と歴史、教育法規と制度等）があり、その具体的中身として教育の内容（教育の全体計画<社会教育・学校教育・家庭教育及び教育行政>、教育課程等）がある。その実現のために、それぞれ教育の方法・技術があるが、ここでは「学校教育における『教育の方法・技術』」に対象を限定したい。また、「教育の方法」と「教育の技術」の関係については、一般的には、前者の方が広い意味で使われる。ここでは、松平信久の分類を援用し論を進めたい。（『新訂教育の方法・技術』松平信久、横須賀薫編、教育出版、2006年）

ア、教育方法……子ども理解と指導法、教材の選択およびその配列法、授業の構想や展開に関わる方途、授業の工夫や実施に対する評価。

イ、教育技術……教育方法の個々の課題を実施し運用するにあたっての高度に洗練された能力

教育技術とは、要するに、「授業についての洗練された計画：P<Plan>→実施：D<Do>→点検：C<Check>→対処・改善：A<Action>の能力」である。

(2)2006（平成18）年12月15日から平成20年3月28日までの一連の法律改正により、「学習指導要領」という文言が、日本の法律上初めて法体系の中に位置づけられた。ちなみに、学校教育法施行規則第五十二条には、「小学校の教育課程については、(略)、教育課程の基準として文部科学大臣が別に公示する小学校学習指導要領によるものとする。」と明示された。また、学習指導要領では「この答申（※中央教育審議会答申）を踏まえ、平成20年3月28日に学校教育法施行規則を改正するとともに、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領を公示した。（全教科共通、『小学校学習指導要領解説』各教科等の2頁）」と記された。

- (3) 文部科学省『小学校学習指導要領』平成20年7月25日、p.13
- (4) 安彦忠彦「今後の学校教育のめざす子ども像」『教育展望—新しい教育課程が目指す子ども像—』(教育調査研究所、2009.9) p.10
- (5) ただし、「指導計画の作成と内容の取り扱い」における道徳教育との関連の解説での「郷土」は除く。
- (6) 文部科学省『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』平成20年8月31日、p.54—55
- (7) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』平成20年8月31日、p.27
- (8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』平成20年8月31日、p.15
- (9) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』平成20年8月31日、p.27、31、36
- (10) 嶋野道弘・寺尾慎一編著『生活科の授業方法—新しい評価を生かす構想と展開』2008.6、ぎょうせい、p.71—72
- (11) 同上、p.72
- (12) 西川一成著『「ふるさと」の発想—地方の力を活かす』2009.7、岩波新書、p.117
- (13) 同上、p.106
- (14) 拙著「「東山」を視点にして、身近な地域の教材化に迫る」『鎌倉女子大学紀要第16号』、2009.3、p.25—36
- (15) 松平信久・横須賀薫編『新訂教育の方法・技術』、2006.7、p. iiiによる
- (16) 同上、p.2
- (17) 奥田真丈・河野重男監修『現代教育学大事典②』、1993.8、p.183による
- (18) (19) 同上、p.183による。
- (20) 拙著「地域学習を創る理念と技術」『教育研究7月号No.1289』、2009.6) p.22—25
- (21) 筆者が、地元の田園町内会長はじめ商店街の古くからの住人から聞き出したものである。尚、②については、『幻の田園都市構想』のシンポジウムのなかで、鎌倉市中央図書館平田が述べた説である。
- (22) ゼミ生の酒井美知子が、大船地区の街路樹を一本一本丁寧に調べ、図に表してきたものである。
- (23) 嶋野道弘・平成20年度第一回食を考える国民フォーラム基調講演「教育ファームで実践—食の大切さを

体全体で学ぶ—」平成20年6月13日による。

- (24) 本論文における大船の3つの顔については、鎌倉女子大学卒業論文『大船の今と昔—大船の教材化—』(H21.3、盛優香他)を参照した。

要旨

日本は資源小国であるとともに、高度で洗練された技術によって成り立つ技術大国である。日本の教師は、この技術者を育てなければならない宿命をもつ。そうであるならば、教師自身も高度に洗練された教育技術をもつ「教育技術者たれ」というのが私の信条である。従来、教育技術については、小手先のこととして、理論より低く見られ軽視されてきたきらいがある。しかし、現場では、頭でっかちの理論を振り回すより、目の前の子どもたちとどう関わり、具体的な姿としてどう変えていくかに焦点がある。洗練された技術をもつイチローを誇りに思いこそすれ馬鹿にする日本人はいない。ぜひ、教師には、洗練された教育技術者を目指してもらいたい。理屈ばかりで、ヒットの打てないイチローは不要である。とはいえ、やはり小手先の技術にばかり目を奪われる教師にはなってもらいたくない。理論だけでは頭でっかちになり、技術だけでは小手先になる。また、情熱だけでは暴走する。

洗練された技術者には、2つの回路があると考えている。一つは、「技術→理論→技術」という回路であり、もう一つは、「技術→勘→技術」という回路である。この両回路を駆使して、常に新たな技術を獲得し、磨いていく教師になって欲しいと考える。⁽²⁴⁾

(2009.10.5受稿)